

文章・談話の理解をめぐる問題

西條 美紀

1. はじめに

本論では、李の「文章論研究の概観」、尹の「第二言語・外国語教育における聴解指導法研究の動向」、池田の「第二言語教育でのピア・レスポンス研究—ESL から日本語教育にむけて」の三本の論文について論じる。

まず、それぞれの論文の目指すところを述べる。李論文は日本語の文章の文章論の概観を行っている。その目的は、日韓の文章構造の違いを明らかにし、韓国人学習者に対し「文章を効率よく理解させる方法を探る」ことにある。尹論文は、聴解指導の理論的枠組み、指導法、評価法を英語、日本語で書かれた論文についてレビューし、「日本語教育における効果的な聴解指導法を考える際の指標を示す」ことを目的としている。池田論文は、ESL と JSL でのピア・レスポンス（学習者間での応答による作文産出・推敲）研究をレビューし、「日本語教育におけるピア・レスポンス研究の方向性を探る」ことを目的としているが、明確に述べられてはいないが、従来の教師によるフィードバックを中心とした作文教育から学習者間の書き手—読み手のインターアクションを前提とした協働的な作文教育への移行を目指しているようである。

これらの論文は、李は文章論、尹は聴解指導、池田は作文の指導と扱う領域は違うが、いずれの論文も文章・談話の理解および生成の指導法をめぐる文献を扱っている。しかし、指導法の前提となる文章・談話の学習者の理解については、どういう立場で、どのように考えるかについて明らかにされていない。その点を補うため本論では、これら三論文の前提となる文章・談話理解についての研究の枠組みを示し、彼女たちのレビュー論文をその枠組みの中に位置づけて論じたい。従って、本論ではまず、文章・談話の理解とは何で、どのように研究されてきたのかを論じ、次に文章・談話研究の方法論的バリエーションを論じ、最後に個々の論文に取り上げられた具体的な問題について論じたい。

ーションを論じ、最後に個々の論文に取り上げられた具体的な問題について論じたい。

2. 文章・談話の理解とは何か

2.1 文章・談話の定義

文章・談話の理解について論じる前に、何を文章・談話と考えるかについて触れたい。本論では、文章・談話を阿部・桃内・金子・李(1994)の定義を踏まえて、「文を超えた単位のまとまり（首尾一貫性）を持った言語表現の集合」とする。この定義は、西條(2002)では、談話の定義としていたものだが、本論では、文章論も扱うので、その学問的伝統を踏まえ、「談話」と一括りにせず、文章・談話とした。時枝(1960)が文章を「文の集合したもの」であって、「ひとまとまりの統一体とするなんらかの原理を含んでいるもの」としていることから、文章論においても、本論の文章・談話の定義は妥当するものと考えられる。

2.2 文章・談話の理解とは何か

文章・談話がどのように理解されるのかを主たる学問領域としているのが、文章理解研究である。文章理解研究は、認知心理学の一分野である。そこでは、「読んだテキストに関する心的表象を作り上げること」（大村 2001）が文章理解であると考えられている。どのように心的表象が作られるのかについては、1960年代から興隆期を迎えたコンピュータの情報処理モデルを援用し、Winograd (1983)に端的に示されているように、言語入力に対し、受け手の知識ベースを対応させ、情報を再構成していくことによって、文章についての心的表象が作られると考えられてきた。本章の尹論文の聴解についての考えは、まさにこの情報処理モデルである。一方、情報処理モデルに対するアンチテーゼとして、1980年代に登場した状況論においては、言語のインデックス性（文脈依存性）ゆえに、言語による相互理解は、

社会的に共有された意味によって発現するのではなく、「むしろ特定の状況に言及するインタラクションのそれぞれの機会において達成される」(Suchman 1987)と考えられている。本章の池田論文のピアによる「協働学習」という考えは、池田論文にも言及があるように、ヴィゴツキーの発達理論に基づくものであるが、本来、子供の科学的知識の獲得方法の概念であったこの「協働学習」が教室活動への提言として、第二言語教育、あるいは第二言語習得理論に持ち込まれるにいたったのは、この状況論からの示唆を受けている。

では、基本的な立場として、情報処理モデルを採った場合と状況論を採った場合とでは、文章・談話研究の方法論はどのように違って来るのだろうか。次節ではこの点について述べる。

3. 文章・談話研究の方法論的バリエーション

3.1 情報処理モデルに基づく研究方法論

情報処理モデルは、言語入力、受け手の知識構造、言語出力を個別の要因と考えている。つまり、それぞれを別個のものとして取り出して分析し、相互の相関を見ることが可能である。これを第二言語習得における文章・談話理解にあてはめれば、学習者が当該の文章・談話の何をどのように理解したのかを、入力―出力の関係において扱うことができるということである。尹論文の主要部分を占めるスキーマ理論に基づく聴解研究は、この方法論を用いている。そして、このモデルに従えば、「より良い理解」とは「より良い心的表象」を作ることであり、どのような心的表象が良いのかという問いを立てることが可能になる。しかし、尹論文においては、その点についての判断が示されていない。もし、その判断があれば、尹は自らが紹介した様々な聴解指導法の優劣を論じることができたであろうし、その結果、「効果的な聴解指導法」が何を指すものであるのかが明確になったであろう。過去の文章・談話理解研究で、何が良い表象とされたのかについては、次章で述べる。

3.2 状況論に基づく研究方法論

一方、状況論においては、より良い理解とは何かという問いそのものが成立しない。状況論では、人間のすべての行為は、状況に埋め込まれた(situated)アドホックな(その場かぎりの)ものであると考える。従って、人間の行動についてのモデルという概

念自体が成立しない。また、行為と、その行為の対象の知覚とは不可分のものであると考えられている(高木 2000)。これを文章・談話理解において考えれば、書く行為そのものの中に、書かれたものの意味があり、読む行為そのものの中に読まれたものの意味があるということになる。情報処理モデルのように、「テキスト」を読む行為の対象物として取り出すことはしないのである。従って、何がどれくらい、どのように理解されたかを論じることは、この研究の枠組みではできない。第二言語習得研究としてできるのは、「学習者は読む、書く、話す、聞く行為の中でどのように、テキストを構造化し、意味づけしていくか」を学習者の行為の個別具体的な叙述によって記録することであろう。池田論文においても明らかのように、ESL におけるピア・レスポンス研究の多くが、学習者の作文産出・推敲活動をビデオ収録し、その行動の具体的な叙述を行っている。しかし、また、多くの論文において、学習者作文についての情報処理モデルを援用した分析が行われている。このような分析によって、協働学習としてのピア・レスポンスが扱えるのかという点には、疑問がある。これは、ピア・レスポンスと他のインターアクションを取り入れた作文指導と何が根本的に違うのかという、この指導法の最も基本的な理論的な問題に関わる点であり、協働学習としてのピア・レスポンスをどのように研究するのかという研究方法論についての問題でもある。

3.3 文章論研究における文章理解

文章論の目的は、文章構造の分析にあって、文章の理解・生成の心的メカニズムを探ることにはない。そして文章論の方法論は、文の連なり(接続・連鎖)を文法的に説明することにある。従って、李論文が目指す、表現スタイル(つまり修辭法)の対照研究を文章論の中に位置づけ、学習者にとって効果的な読解法についての示唆を得ようとするとは、方法論的に無理があると言わざるを得ない。時枝(1960)においても、文章研究(文章論)と修辭法についての研究は、混同するべきでないことが述べられている。そして、李論文におけるこの混同は、文章論における「文章の構造」とは何かという点と関係している。この点については次節で述べる。

4. 各論文で取り上げられた諸問題について

ここでは、前節を踏まえ、それぞれの論文で取り

上げられている諸問題について、李論文、尹論文、池田論文の順で述べる。

4.1 文章論における「文章の構造」について：李論文に対するコメント

李は、永野の「接続論」、「連鎖論」、「統括論」の枠組みを援用して、時枝から、佐久間までの文章論を概観している。この枠組みは、文章論における主要な論点を概観するという点においてはわかりやすく、初めて文章論に接する読者への研究領域見取り図としては意義がある。しかし、李論文のこの枠組みが、現在の文章論における理論的な枠組みを伝えているかどうかについては疑問が残る。

第一に、李が用いている「接続論から見た文章構造」、「連鎖論から見た文章構造」、「統括論から見た文章構造」という観点である。佐久間(1983)¹においてすでに、隣接した文の連なりを論じる永野の「接続論」から、「接続機能を有する文の連続体」が連文であって、連文は必ずしも隣り合った文の接続体でなくても良い」とされる「広義の連文論」への移行が提唱され、文の連鎖（配列・呼応）関係や文章の統括を連文論として論じようとする枠組みが提示されている。佐久間のその後の研究は、この枠組みにおいて行われているし、石黒(1998)にも接続を「隣り合った文」に限らない見解が述べられている。

第二に、李論文においては、「文章の構造」という言葉は永野(1986)の「文章を、全体として眺め渡した時の結構」という意味で用いられているようである。しかし、文章論において、この「文章の構造」が何を指すのかという点は重要である。佐久間(2000)は、文章構造とは、統括（話題のまとまり）の関係による重層構造であると述べている。（この「統括」についての先行研究における概念の変遷は李論文に詳しい。）一方、佐久間の一連の研究には、文章中の主題文（あるいは中心段）の配置による「文章型」についての研究がある。これは、文章のどこに主題文を配置するかによって、文章の型をいくつかに分類しようとするものである。これは文章構成の分類であって、文章の構造についての記述ではない。文章の論理的な関係を示しているものではないからである。李論文はこの文章構成の問題と文章構造の問題を混同したと考えられる。

4.2 文章理解研究における「良い表象」について：尹論文に対するコメント

尹論文については、前節でもだいぶ述べたので、

ここでは、前節で触れた「良い表象」についての先行研究に述べるにとどめたい。

「良い表象」とは何かという問題については、研究者間で意見の相違のあるところかもしれないが、「良い表象とは、結束性のある（結束的）表象である」（大村 2001）ということについては、基本的に情報処理モデルを用いて文章・談話理解を考えている研究者間では見解の一致があるのではないかと思われる。結束性とは、要素間の関係性が緊密であることを意味する。

心的表象は、何によって結束的になるのかという問いに対しては、文章・談話中のどんな要素が心的表象に影響を与えるのかというアプローチと、当該の文章・談話に関して持っている受け手のスキーマを活性化させるものは何かというアプローチがある。前者の「文章・談話中の要素」の点に関しては様々な研究があるが、尹も取り上げている講義理解の問題についても講義のディスコースマーカーが聴解に与える影響についての一連の研究がある。これについては、西條(2000)でレビューしてあるので、尹論文と合わせて参照されたい。後者の「スキーマ活性化」については、尹論文でも詳しく紹介されている。

4.3 第二言語習得におけるピア・レスポンス：池田論文に対するコメント

池田論文は、ESL と JSL におけるピア・レスポンスのレビューであり、ここまで網羅的なものはおそらく邦文では初めてのものであろう。その意味でこの論文の資料的意義は高いし、本書に展望論文として掲載されるのも、作文技法としてのピア・レスポンス研究の全体像を描けているからだと考えられる。

しかし、個々の文献のピア・レスポンス研究における位置づけは、この池田論文でわかるものの、「ピア・レスポンス」という領域全体の第二言語習得研究における研究史的な位置づけが良くわからない。それは、前節で述べたような「協働学習」を教室活動として見る時の理論的な枠組みが不安定であることの表れでもある。前節では、「情報処理モデル」と「状況論」との対比において、文章・談話の理解をどう見るかが違い、その研究方法論も違ってくるということを述べたが、このピア・レスポンスの理論的枠組みを明確にするには、状況的学習論における「誰が学ぶのか問題」が第二言語習得理論において検

討される必要がある。この「誰が学ぶのか問題」とは、学ぶということは、個人が個人の頭の中で知識を構成することなのか、共同体が共同体の実践の中において、その実践に習熟することが学びであるのかという問題である。詳しくは、Lave & Wenger (1991)、西口(1999)を参照されたい。ここでは、この問題を第二言語習得と関連付けるにあたっては、状況的学習理論を取った場合、教室での学びの場が共同体であると言えるのかどうかということが最大の問題であることを指摘しておきたい。

5. 終わりに

本論では、この章に集録された三論文について検討しながら、文章・談話研究における理論的な枠組み、その方法論、第二言語習得との関わりについて述べたが、終わりに述べたいのは、この文章・談話をめぐる問題が学問的に広がりのある未開拓の領域であるということである。その意味で、一見、相互に関連のなさそうな三論文がひとつの章に納められていることでかえって、読者の文章・談話を見る見方が広くなり、深くなるかもしれない。その点においてこの解説文が貢献できれば幸いである。

注

1. 佐久間(1983)には、文の接続関係についての、それまでの諸説が詳細にレビューされており、李論文において、文章論の主要な問題を知った読者がさらに、文法論としての文章論を知ろうとする時の良き手引きとなるであろう。李論文では、扱われていないので、紹介しておく。

参考文献

- 阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李 光五 (1994) 『人間の言語情報処理 言語理解の認知科学』サイエンス社
- 石黒 圭 (1998) 「予測の読み—連文論への一試論」『表現研究』64, 67-74.
- 大村彰道 (2001) 「文章理解：結束性と意味の創造」『文章理解の心理学』大村彰道監修 北大路書房
- 西條美紀 (2000) 「談話構造図作成法によるノート・テーキング」『講座 日本語教育』36, 53-68.
- 西條美紀 (2002) 「談話ストラテジーと日本語教育」『ことばと文化を結ぶ日本語教育』細川英雄編 凡人社印刷中
- 佐久間まゆみ (1983) 「文の接続—現代文の解釈文法と連文論」『日本語学』2-9, 33-44.
- 佐久間まゆみ (2000) 『日本語の文章・談話における「段」の構造と機能』平成9年度-11年度科学研究 費補助金(基盤研究(c)(2)) 研究成果報告書
- 高木光太郎 (2000) 「行為・知覚・文化—状況的認知アプローチにおける文化の実体化について—」『心理学評論』43, 43-51.
- 時枝誠記 (1960) 『文章研究序説』山田書院
- 永野賢 (1986) 『文章論総説』朝倉書店
- 西口光一 (1999) 「状況的学習論から見た日本語教育」『大阪大学留学生センター論叢 多文化社会と留学生交流』3, 1-15.
- Lave, J. & Wenger, E. (1991) *Situated learning -Legitimate peripheral participation*, NY: Cambridge University Press. (佐伯 胖訳 1993 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書)
- Suchman, L. A. (1987) *Plans and situated actions -The problem of human machine communication*, NY: Cambridge University Press. (佐伯 胖監訳 1999 『プランと状況的行為』産業図書)
- Winograd, T. (1983) *Language as cognitive process*, *Syntax*, Vol.1, MA: Addison- Wesley.

(さいじょう みき/東京工業大学)